

(川内市御陵下町字越ノ巢)

位置と環境

越ノ巢火葬墓が発見された一带は、通称瀬ノ岡と呼ばれ、標高50m前後の台地が広がっており、南側にやや傾斜をなして延びている。遺跡は、JR 鹿児島本線の上川内駅から北東方向へ500mの所に位置する。

昭和50年(1975)には、ほぼ南方向に300m離れた通称屋形原から土師器製の蔵骨器が出土しており、平安時代後期のものではないかと推定されている。

調査の経緯

越ノ巢火葬墓は、昭和61年(1986)に農工業団地造成工事中に発見された。この一带は、造成工事前の昭和59年(1984)に市教育委員会によって、埋蔵文化財等の分布調査を実施した場所であるが、踏査では遺物等の散布は見られなかった。

「火葬墓を発見した」との通報を受けて、現地に出発した際には、すでに蔵骨器及び外容器の一部は、埋納施設から取り出された状態であったため、出土状況について、工事関係者に聞き取り調査を行った。

発見時の状況は、重機で1回掘削を行ったら出土したらしく、その際、外容器は粉々に割れたが、蔵骨器はそのままの位置で発見された。また、その時に埋納施設の北西側は破損されており、内部には多量の木炭が出土している。

残存する埋納施設を見る限り、第2図のように蔵骨器を安置されたのではないかと推定する。

遺構と遺物

埋納施設の構築は、この台地の表層下がすぐ溶結凝灰岩が層をなしているため、これを楕円状に長径約110cm、短径約70cm、深さ40cmの掘り込みを造り、周囲を大小の石で囲んだのち、床面を整地して蔵骨器を安置し、その上に蔵骨器を保護するために須恵器製の壺を外容器として、逆さに被せたのではないかと考える。その際、壺の頸部から口縁部にかけては意識的に打ち欠いている。

埋納施設内には、多量の木炭が使用されており、外容器の壺の内側にも木炭がコールタール状化して



第1図 越ノ巢火葬墓の位置

付着していることから、蔵骨器と外容器との間にもある程度、木炭を入れていたのではないかと考える。

また、周囲の石の側面が黒ずんでいるため、外容器との間にも木炭が敷き詰められていた可能性がある。

越ノ巢火葬墓で発見された蔵骨器は、須恵器製の有蓋短頸壺といわれるもので、総高は19.8cmである。

壺(身)は、口縁部が立ち上がり、肩部が張り、壺底には低い高台が付くものである。壺の最大幅は、21.1cmである。器面は、ヘラ削りを横位に行っている。

蓋は、擬宝珠形のつまみが付くもので、口縁部の径は14.1cmである。天井部から口縁部にかけては、やや外に開き気味である。天井部はナデ調整を行い、体部はヘラ削りで整形している。天井部には火だすきが見られる。

蓋・壺(身)とも色調は、灰褐色及び一部黒褐色をなし、全体的に自然釉が見られる。

外容器は須恵器製の壺で、頸部から口縁にかけては欠損している。残存の高さは27cmで、胴部の最大幅は31.4cmである。色調が黄褐色を呈しているため、一見、土師器製の壺ではないかと思えるぐらいに焼成はよくない。内面には同心円叩きが見られ、肩部内面から口縁部にかけて施されている。また、底部にかけてはヘラ削りを行っている。

内面には、木炭のコールタール状のものが胴部から肩部にかけて顕著にみられた。

発見された蔵骨器の中には、焼骨が残っていたため、鹿児島大学歯学部口腔解剖学教室に鑑定を依頼

した。

報告書によると、火葬骨は1体分の人骨で、乾燥後の総重量は約840gであるが、大部分が細片となっているうえ、歪み、亀裂、収縮など焼骨特有の変化をきたしているため、骨の部位が同定できるものは少数であった。性別は、遺存する後頭部の外後頭隆起が強く突出していることから男性骨と判定され、歯の状態から成人骨であることがわかった。

特徴

火葬墓が発見された字越ノ巣は、律令制の時代には高城郡に属し、江戸時代に刊行された『寛藩名勝考』や『三国名勝図会』の記述以来、薩摩国府跡とされた字屋形原に境を接する地である。

字屋形原の北東側は、瀬ノ岡と呼ばれる台地であり、越ノ巣火葬墓は字屋形原の地を見下ろす位置にある。

薩摩国府跡は、昭和39年(1964)から昭和42年(1967)までに3回の発掘調査が県立川内高校や県教育委員会が実施し、この調査結果により御陵下町から国分寺町にかけての四方六町域が新たに比定され、現在ではほぼ定説化されている状況であるが、越ノ巣火葬墓の発見は、屋形原一帯の歴史を再考す

る上で、貴重な資料といえる。

蔵骨器を直接墓壇に埋納した例が多数を占めている中で、越ノ巣の火葬墓は、埋納施設の構造を地形や地質を考慮して造ってあることも特徴であるといえる。

また、須恵器製の蔵骨器は、有蓋短頸壺と呼ばれるものであるが、壺底に低い高台が付いており、蓋に擬宝珠形つまみが付くが、つまみの擬宝珠形がやや退化していることから8世紀後半に位置付けるものである。そして、外容器については、焼成の良くない須恵器を用いているが、蔵骨器とともに生産地の追求や類例資料との対比を進めることにより、越ノ巣火葬墓がもつ意味が、出土地点も含めて評価されるであろうと考える。

資料の所在

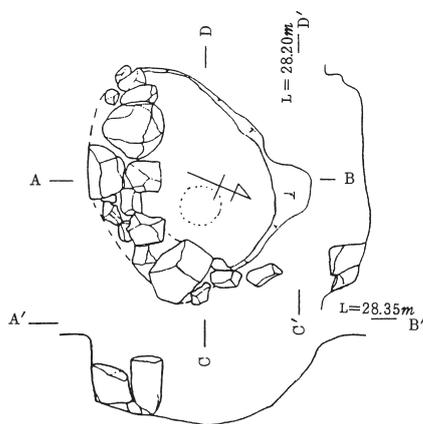
出土遺物は、川内市歴史資料館に保管されている。

参考文献

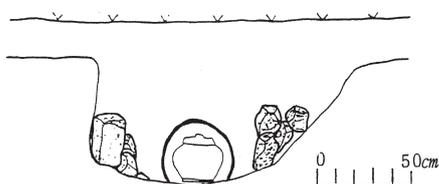
川内市歴史資料館1987『川内市歴史資料館年報昭和61年度版』

川内市歴史資料館1988『川内市歴史資料館年報「昭和62年度版」』

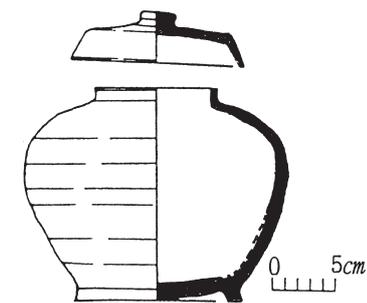
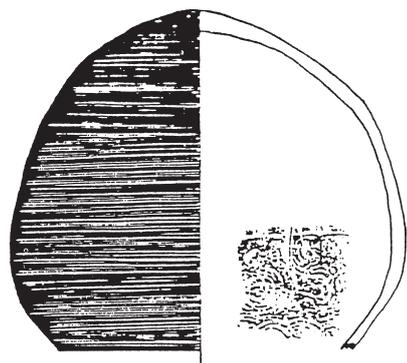
(中島哲郎)



第2図 火葬墓遺構実測図



第3図 火葬墓遺構復元図



第4図 蔵骨器外容器・蔵骨器